

## 35 十二指腸腫瘍に対する低緊張性十二指腸造影

埼玉協同病院

○安部 小百合

### 【はじめに】

低緊張性十二指腸造影とは、鎮痙剤で蠕動を抑え十二指腸平滑筋の緊張を緩めた状態で十二指腸まで鼻から細いチューブを挿入し、直接チューブから造影剤・空気を挿入して撮影を行う検査である。

上部（胃）消化管検査との違いはバリウム服用方法・空気量の調節・造影範囲である。

本年度、当院では3症例の低緊張性十二指腸造影を行った。

その症例報告と低緊張性十二指腸造影についての説明を行う。

### 【低緊張性十二指腸造影の利点と適応疾患】

- ①胃など他の臓器との重なりが無く、十二指腸のみの描出が可能
- ②直接バリウム・空気を注入するため適切な二重造影が得られる
- ③十二指腸粘膜下腫瘍
- ④ファーター乳頭部腫瘍

⑤膵臓など近接する臓器に腫瘍や炎症が見られた場合の十二指腸の狭窄の有無と程度の確認など

<症例1>

85歳 男性 十二指腸乳頭部癌

<症例2>

72歳 男性 十二指腸癌

<症例3>

75歳 男性 GIST

### 【結語】

低緊張性十二指腸造影では病変の位置を客観的に把握できるので術前検査に適しているといえる。

ただ、胃の検査と違い十二指腸はバリウムや空気を注入しても、すぐに小腸へ流出してしまう欠点もある。

そのため病変部の二重造影を得るには、バリウムや空気を注入する量やタイミングの調整を適切に行う事が重要であると考えられる。